

鬼の棲む山に迷い込んだカントの薬売りが「百年ぶりの人間、しかもこの身体か」と鬼の頭領に洞窟の奥で喰われる話

「ッ——」

隣に、何かがいる。いや——誰かが。

横たわったまま首だけを動かすと、岩の寝台の反対側に巨大な影が座っていた。焚き火の明かりに浮かぶのは、額に二本の短い角。赤みがかった肌。人間より二回りは大きい躯体。

鬼だ。

柚月の背筋が凍る。声を出すより先に、鬼がこちらを見た。暗い瞳。底の見えない、深い色。

「起きたか」

低い声が洞窟に反響する。振動が岩壁を伝って、柚月の背中にまで届いた。

「百年ぶりの人間だ」

鬼がゆっくりと立ち上がる。六尺半はある巨躯が、焚き火の光を遮った。

柚月は本能的に後ずさろうとする。が、腰が言うことをきかない。落下の衝撃で痛めたらしい。代わりに口が動いた。

「——喰うなら、さっさとやれ。気を失ってるうちに喰えばよかっただろう」

鬼が、ほんの一瞬、目を細めた。

「気が強い。崖の下で死にかけていた割にはな」

「死にかけようが生きてようが、俺の口の利き方は変わらねえ」

「……ほう」

鬼が一步近づく。柚月の全身が強張った。逃げ場はない。洞窟の奥、背後は岩壁。

鬼の手が伸びてくる——柚月の顎を掴み、顔を上に向かせた。

指が熱い。人間の体温ではない。じわりと皮膚を灼くような、異常な熱。

「ッ……」

「崖から落ちて骨が折れかけていた。手当てはしてやった。——帯も緩めた」

柚月の血の気が引く。

着物の合わせが乱れている。下帯が、ない。

「……お前」

「カントか」

淡々とした声。嘲りも驚きもない。ただ事実を確認する声。

「百年ぶりの人間、しかもこの身体か」

柚月の喉が締まる。男として旅をしてきた。身体を知る者は誰もいなかった。それを——こんな場所で、鬼に暴かれた。

「……殺すか」

「殺さん」

即答だった。柚月の顎を掴んだまま、鬼は続ける。

「俺は焰。この山の頭領だ。名は」

「……柚月」

「柚月。——お前に取引を持ちかける」

焰の指が顎から離れる。触れていた場所が、まだ熱い。

「俺の伴侶のふりをしろ」

「……は？」

「一族の前で、番として振る舞え。俺に楯突く副頭領を黙らせるまでの間だ」

「断る」

「鬼灯蘭が欲しいのだろう」

柚月の目が見開かれる。薬草袋が寝台の脇に置かれていた。中身を見たのだ。鬼灯蘭の採取道具。

「この山にしか生えない薬草を、疫病の村へ持ち帰りたい。違うか」

「……」

「鬼灯蘭をくれてやる。契約が終われば」

(……くそ)

断る理由がない。村では人が死にかけている。鬼灯蘭がなければ帰れない。

「——好都合だ、と言うつもりか。俺がカントだから、伴侶役として説得力がある、と」

「話が早い」

柚月は齒を食いしばった。身体の秘密を握られ、薬草を人質にされ、偽りの番を演じろと言われている。

（上等だ。演技くらい、やってやる）

「……分かった。ただし触るな」

「触らずに番のふりができると思うか」

「——最低限にしろ」

焰は答えなかった。

ただ、暗い瞳の奥で何かが揺れた気がした。

＊

最初の夜は、それだけだった。

石の寝台に並んで横たわる。柚月は端に寄り、背を向けた。

（鬼の体温が異常に高い——）

焰との距離は腕一本分。なのに、岩穴の冷気を突き破って焰の熱が柚月の背中に届く。

（寒いからだ。洞窟が冷えるから、隣の熱源に身体が反応してるだけだ）

眠れない。目を閉じてても焰の気配が消えない。呼吸の音。時折身じろぎする岩の軋み。

寝返りを打った拍子に、肘が焰の腕に触れた。

「——ッ」

火傷するかと思った。鬼の肌は、焚き火の残り火みたいに熱い。

反射的に腕を引く。心臓がやかましく鳴っている。

「……怖いかな」

低い声。起きていたのか。

「怖くない」

嘘だ。怖い。でも恐怖の種類が違う。鬼が怖いんじゃない。  
——触れた瞬間、身体の芯がぞくりと疼いたことが、怖い。

焰は何も言わなかった。触れてきた腕を引きもしなかった。

柚月は自分の手首を反対の手で握りしめ、心臓の音を押し  
殺すようにして、朝を待った。

翌朝、一族の前に引き出される。

洞窟の広間。松明の明かり。数十の鬼たちが岩の段に座り、  
焰と柚月を見つめていた。

「頭領が人間を伴侶に？」

「しかもあの身体つきは——」

ざわめく声。視線が肌を刺す。

焰が、柚月の肩に手を置いた。

「ッ——」

大きな手のひらの熱が、着物越しに肩を灼く。柚月の心臓  
が跳ねた。

（演技だ。演技だ、これは）

「俺の番だ。異論のある者は前に出ろ」

焰の声が広間を制した。静寂が落ちる。

一人の鬼が立ち上がった。焰と同じく角を持つ、しかし焰より一回り小さい男。烈火。副頭領。

「面白い。ではその人間に、番の証はあるのか」

焰は答えなかった。

ただ柚月の肩に置いた手を、ゆっくりと首筋に滑らせた。

「——ッ」

指先が、耳の後ろから鎖骨へ。着物の襟に沿って、ゆっくりと。

柚月の膝が震える。

(やめろ——こんなところで——一族が見ている——)

演技だ。分かっている。だが、身体が分かていない。焰の指が首筋に触れるたび、下腹の奥がじわりと熱くなる。

「証は追って示す」

焰が手を引いた。

柚月は震える足で立ったまま、自分の首筋を押さえた。

焰の指の軌跡が、焼き印のように消えない。

＊

偽りの番の生活が始まった。

焰は柚月を自由にさせた。山の薬草を採ることも許し、鬼の子供たちの擦り傷を手当てすることも咎めなかった。

ただ——烈火の目がある場所では、焰は容赦なく柚月に触れた。

腰に手を回す。

首筋に鼻を寄せる。

耳元で低く囁く。

実際に言っているのは「動くな」の三文字だけだ。

だが、その声の振動が耳朶を震わせるたび、柚月の身体は裏切った。

腰に回された手の熱。指が着物の上から骨盤をなぞる感触。  
首筋をかすめる吐息の湿り気。

(……演技だ)

夜、石の寝台で焰の背中を見つめながら、柚月は唇を噛む。  
(あの手が——腰じゃなくて、もっと奥に触れたら、どうなる)

考えてしまった瞬間、下腹がきゅっと収縮した。

(ばかか俺は——これは契約だ、鬼灯蘭が手に入ればそれで終わる関係だ——)

太腿を閉じて、疼きを押さえつける。

でも身体は正直だった。下着に染みが広がっていることに気づいて、柚月は暗闇の中で顔を歪めた。

(男だ。俺は男なんだ。鬼なんかに——こんな——)

ある夜、朱殿の温泉で二人きりになった。

地底から湧く湯が岩の窪みに溜まり、白い湯気が洞窟の天井を這っている。硫黄の匂いが鼻腔に張りつく。



柚月は湯の端で薬草の調合をしながら、ぼつりと漏らした。  
「……あんた、本当に百年も独りだったのか」

焰は答えなかった。

湯の音だけが反響する。ぴちゃん、ぴちゃん、と水滴が鍾乳石から落ちる音が、沈黙を刻んだ。

柚月は横目で焰を見た。

角を持つ横顔。湯気に滲む輪郭。人間ではない。異形だ。

でもその瞳の奥にあるものを、柚月は知っている。

——独りで生きてきた者の目だ。

父が死んでから、ずっと独りだった。カントの身体を隠し、誰にも触れさせず、誰にも本当の自分を晒さず。

沈黙のまま、柚月は焰に近づいた。湯の中で、焰の手に自分の手を重ねる。

焰が、一瞬、目を見開いた。

何も言わない。

柚月も何も言わない。

鬼の手は、やはり熱かった。湯よりも。

＊

転機は唐突に来た。

烈火が一族の集会を招集し、焰と柚月の番を糾弾した。

「噛み痕もない。契りの証もない。この人間はただの傀儡だ」  
広間がざわめく。

焰が柚月の顎を掴んだ。

——迷いのない動きで首を傾けさせ、首筋に歯を立てた。

「ッ——！！」

鬼の牙が皮膚を裂く。鋭い痛みが走ると同時に、腹の奥がぐちゅっ♡と疼いた。

熱い。痛いのに——熱い。

焰の舌が傷口を舐める。唾液が傷に染み込み、じわじわと痺れるような感覚が首筋から背骨を伝って全身に広がった。

「ん……ッ……♡」

声を噛み殺す。一族の前だ。見られている。

だが膝が笑っている。股の間が、じわりと濡れた。

(嘘だろ——こんなの——痛いだけだ——)

痛いだけのはずなのに、焰の舌が傷口をひと舐めするたび、子宮の奥がきゅうっと締まる。

一族の前では毅然とした顔を保った。烈火が黙り、集会が終わる。

朱殿に戻った瞬間、柚月は壁に手をついて膝から崩れた。

「……っ、は……はっ……」

首筋がまだ熱い。焰の唾液の感触が消えない。噛み痕が脈打つたびに、下腹がずきんと疼く。

背後に気配。

「傷が痛むか」

「——来るな」

振り返れない。今の自分の顔を見られたら終わりだ。

焰の手が、柚月の肩に触れた。着物越しでも分かる、鬼の体温。

その手が肩から首筋に移動する。噛み痕のすぐ傍を、指先でゆっくりと撫でた。

「ん……っ♡」

甘い声が漏れた。口を押さえるが、遅い。

「ここか。さっき歯を立てた場所だ」

「触る、な……っ」

「嫌か」

柚月は答えられない。

——嫌じゃない。嫌じゃないことが、どうしようもなく怖い。

焰の指が噛み痕を辿り、鎖骨へ滑る。着物の合わせに指が入った。

「やめ……っ」

「本当にそう思っているなら、身体が震えるはずがない」

着物の合わせが緩む。指先が鎖骨の窪みを撫で、胸元に向かって降りていく。

柚月の呼吸が荒くなる。逃げなくてはいけない。逃げなくては——

指が、胸の膨らみの縁に触れかけた、その瞬間。

「頭領ー！ 烈火の手下が西の峠で暴れてるー！」

洞窟の入り口から甲高い子供の声。

焰の手が、止まった。

柚月の胸元から、ゆっくりと離れる。

「……続きは後だ」

焰が出て行く。

柚月は一人残され、壁に背をつけたまま、自分の胸元を掴んだ。

心臓が壊れそうに鳴っている。着物の合わせから覗く肌が、焰の指が辿った軌跡に沿って赤く火照っていた。

（——「続き」って、何の続きだ）

下着が濡れている。指一本、まともに触れられてもいないのに。

（演技の……何の続きだ……っ）

身体の奥が、疼いて止まらなかった。

＊

烈火の反乱が激化した。

焰は一族を守るために洞窟を離れ、数日間、朱殿に戻らなかった。

柚月は一人で薬草を調合しながら、何度も洞窟の入り口に目をやった。

（帰ってこない）